

# 香川大学 大学教育基盤センターニュース

No.17 令和5年12月

*Higher Education Center  
Kagawa University*

香川大学 大学教育基盤センター  
〒760-8521 高松市幸町1-1  
Tel 087-832-1151~1154  
Fax 087-832-1155  
<https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/>

## 目 次

1. 第70回中国・四国地区大学教育研究会報告…………… 1
2. ティーチング・フェロー(TF)講習会の実施について…………… 6
3. 危機管理学×数理・データサイエンス・AI教育特別プログラムについて…………… 10
4. 創造的科目支援育成事業の報告…………… 11
5. よりよい授業のためのFDワークショップ報告…………… 16
6. 注目のFDのご紹介…………… 18
7. 全学共通科目の授業公開報告…………… 21

## 1. 第 70 回 中国・四国地区大学教育研究会報告

中国・四国地区大学教育研究会が、令和 5 年 6 月 17 日に開催されました。この研究会は、大学等での教養教育を主題的に扱うもので、今年で 70 回目となります。昨年度に引き続き、オンラインでの開催となった今回は、メインテーマ「今、教養教育で何を学ぶか」のもとで、基調講演及び分科会が執り行われました。以下、研究会の様子を、参加した本学教員が報告します。

### ■基調講演

前大学教育学会会長で同志社大学教授の山田玲子先生より、「21 世紀型教養教育の方向性：文理融合とグローバル・コンピテンスを視点に」と題して基調講演がございました。そのアウトラインは、21 世紀型リベラルアーツ教育について、大学基準協会調査から、日本における文理融合型教育について、学際性と文理融合型教育に関する先行研究知見から、もうひとつの要素：グローバル・コンピテンスと大学教育：米国における STEM 及び人文・社会卒業生のグローバル・コンピテンスの修得状況と仕事、であり、いずれも教養教育担当者が知っておくべき刺激的な内容でした。その中でも特に、本学全学共通教育の改革動向と照らしあわせて印象に残ったのは、文理融合型教育に関する内容でした。「なぜ文理横断・文理融合教育等を推進する必要があるのか」と問われたときに、「ソサエティ 5.0」実現のため、という回答は比較的容易に浮かびます。しかし、歴史的経緯や他国の状況に目をやれば、それとは異なる回答を得ることも可能です。加えて、高大接続や大学院教育を踏まえ、教養教育の役割を問われれば、現状とは異なる文理融合型教育の在り方が構想できるのかもしれませんが、基調講演では、そうした論点が提示され、本学における文理融合型教育について再考するこの上ない機会となりました。（文責：西本佳代）

### ■講演

広島大学平和センター長の川野徳幸氏より『「理想」と「現実」で揺れる「平和」：広島大学「平和科目」を通して学生に期待したいこと』と題する講演が行われました。同講演によれば、冒頭に「ウクライナ戦争」をめぐる「理想」と「現実」をはじめ、広く「平和観」が揺らいでいることの危機感が示されました。特に、核兵器なき世界を主軸に置いている被爆地・広島（ヒロシマ）という歴史的な立ち位置に加え、学問としての「平和学」についてもご教示いただきました。次に、同講演では、読売新聞と広島大学平和センターによる「学生平和意識調査」の結果概要が解説された後、広島大学で展開されている「平和科目」の授業事例が紹介されました。上記の「理想」と「現実」の視点から豊かな人間性を培うことが「平和科目」の主目的であり、広島大学の「理念 5 原則」の一つである「平

和を希求する精神」を十分に踏まえることの教育的意義についても指摘されました。今後の課題として、例えば、再履修者の問題や各学部からの「平和科目」の提供等について挙げられました。同講演を拝聴した上での個人的な見解になりますが、各大学の「理念」やミッションと教養教育科目をいかに位置づけるのか、その架橋をいかに目指して実践していくのか、という我が国の大学カリキュラムをめぐる構造的な問題の解決に取り組んでいく必要性を感じます。

なお、同講演後に文責者が情報収集したところでは、以下の〔参考情報〕にあるウェブサイトにおいて、広島大学の「平和科目」及びその中で行われている「平和を考えるレポート」の詳細について関連情報が掲載されています。ご覧ください。（文責：蝶慎一）

※〔参考情報〕 以下は、文責者の情報収集による。（2023年6月17日最終確認）

- ・広島大学、「理念・ビジョン」、<https://www.hiroshima-u.ac.jp/about/philosophy>
- ・広島大学教育推進グループ（教養教育担当）、もみじ 広島大学 学生情報の森、「平和科目※2023年度受講者の情報です」、  
[https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/kyouyou/post\\_1.html](https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/kyouyou/post_1.html)
- ・広島大学教育推進グループ（教養教育担当）、「2023年度【平和科目共通課題】『平和を考えるレポート』について」、  
<https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/kyouyou/54f0a00a62358db3c66e7f756cd939f46d6696b3.pdf>

#### ■人文・社会・自然科学分科会

「教養教育において人文・社会科学の視点と自然科学の視点をどう融合し、どう伝えるか」をテーマとして、澤井努（広島大学）、山田俊弘先生（広島大学）、新名阿津子先生（高知大学）の三名より報告をいただきました。澤井先生からはiPS細胞に関する倫理的問題を扱う授業についての紹介がありました。本学の全学共通教育において文理融合というと《異なる専門を持つ教員の協同》というイメージが強いのですが、応用倫理学は文理融合を前提とした学問です。このような学問に目を向けて、そこから文理融合について考える必要性に気づかされました。山田先生の種生物学の講義では、ダーウィンの理論がナチズムの理論的背景になったという歴史的事実を取り上げているそうです。不十分な根拠に基づく学問的越境に目を向けさせ、文系・理系をバランスよく学ぶ必要性を指摘するというアプローチは興味深いものでした。新名先生からは、ジオパークを活用したPBL型授業の事例紹介をいただきました。先生の人脈を活用して、地域に深く踏み込んでいく活動には、教養教育でここまでのことができるのか、という驚きがありました。報告後のディスカッションでは、私からも、本学で行っているオムニバス授業について報告をさせていただきました。オムニバス授業をうまく進めるために必要なことについて、報告者の方からご意見をうかがえたことは収穫でした。（文責：佐藤慶太）

## ■情報教育分科会

本年度の情報教育分科会においては、「数理・データサイエンス・AI」の教育が普及する中での情報教育に関する課題と取り組み、2025年度に向けた情報教育改革の準備状況等の事例をもとに、VUCA時代の一般情報教育をテーマとした議論が行われました。「VUCA時代の一般情報教育（※テーマと同タイトル）」稲垣知宏先生（広島大学 情報メディア教育研究センター 教授）から、データサイエンス教育を含めた一般情報教育の将来像について、「一般情報教育の共有コンテンツ活用の報告」川崎梨江先生（比治山大学 情報メディア教育研究センター 助教）から、大学間で共有できるリテラシーレベルのコンテンツ（動画）を活用した授業実践例や効果的な情報教育手法について、「生成系 AI を利用した一般情報教育の可能性」村上祐子先生（広島大学 情報メディア教育研究センター 助教）から、ChatGPT を利用した実践例の紹介や教育の可能性についての検討等の発表がありました。また、質疑応答では、BYOD による一般情報教育への影響や生成系 AI への対策案なども共有されました。総じて情報教育に関する深い議論が展開される、有意義な分科会となりました。（文責：藤澤修平）

## ■外国語（英語）・外国語（初修）合同分科会

広島大学の吉満准教授の司会進行により、Zoom ミーティング形式で行われました。

1 件目の発表は、広島大学外国語教育研究センターの山本准教授による「TA と協働して行う初修中国語のオンライン同時双方向型授業」でした。広島大における中国語のオンライン授業では、Teams を用いてマイクオフの「大教室」で解説を受けた後、「小教室(break-out)」へ移動し、留学生を TA として活用しながら統一的な授業運営がなされていました。チャット質問や Forms 小テストの活用や、正確な時間や進度を担当教員間で情報共有することの重要性についての指摘がありました。

2 件目の発表は、広島大学外国語教育研究センターの天野准教授による「二次元仮想空間を活用したタスクベースの英語スピーキング指導」についての発表でした。ウェブベースの仮想空間「Gather」のアバターとなって授業を受け、対話練習をする実践例でした。ロールプレイ形式で飽きさせず、3D ではないので VR 酔いもないとのことであり、学生による自己評価も向上する傾向が報告されました。

3 件目の発表は、山口大学総合技術部の山田技術専門職員による「ポストコロナ社会におけるメタバース語学留学の可能性と実践例」でした。コロナ禍で海外渡航に制限のかかる中で、工学部附属工学教育研究センターでは語学及び技術研修のため、シェフィールド大学の協力を得て VR を利用した「メタバース留学」を実践しました。ヘッドセットが重く、学生には高価過ぎる（貸し出し用を購入）との指摘もありました。

4 件目の発表は、島根県立大学国際関係学部の江口教授による「同時双方向ビデオ会議を用いた異文化理解能力の育成の成果と問題」でした。地方の公立大学がイーストカロライナ大学と共同授業を展開するため、スカイプからポリコムへ、さらにズームへと変更と

工夫（マイクは手に持つ、専用の教室を作る等）を重ねながら、「異文化理解特別演習」を開講している報告でした。（文責：長井克己）

#### ■日本語・日本事情分科会

コロナ禍における遠隔授業、CLIL、COIL、国際共修の普及等をふまえ、「新たな状況に対応して変化する日本語教育」というテーマのもと、4件の報告が行われました。

1. 「中級日本語学習者のハイフレックス形式インタビュープロジェクトの実施」  
川崎 千枝見先生（山口大学 助教）
2. 「日本語教員養成課程入門科目におけるオンラインツールを活用した授業実践の試み」  
西條 結人先生（広島大学 准教授）
3. 「主体的な学び、教育企画、自己」 西口 光一先生（広島大学 特任教授）
4. 「主体的な学びに応える LMS」 名塩 征史先生（広島大学 講師）

1 では、未渡日の留学生と渡日済み留学生が、対面とオンラインを併用し相手を変えながら日本人学生に1対1でインタビューを行うプロジェクト、2 では SNS、YouTube 等を活用した海外日本語教育事情の学習、4 では独自の日本語学習支援システム開発の経緯・工夫・課題等について報告され、3 では「言語技量」「自己表現」といった観点から本来的な学びのあり方について問題提起されました。各種ツールの活用により地理的・心理的なハンデが軽減されうる一方で、留学の意義や言語教育の本質が改めて問われることを再認識する場となりました。（文責：塩井実香）

#### ■初年次教育分科会

本分科会では、「高校から大学への移行：初年次教育で何を学ぶべきか？」を主なテーマとして、以下の4本の事例発表が行われました。狭義の初年次教育のみならず、リメディアル教育、補習教育、入学前教育、2年次以降の教育や学びについても検討対象とされ、参加者の疑問を踏まえる形で議論が進められました。

まず、広島工業大学工学部の大村訓史氏による「基礎学力と思考力を養成する入学前・リメディアル教育～広島工業大学の取り組み～」の発表では、同大学工学部に入学予定の段階から大学での学びの「接続」を意識した取組を教育学習支援センターという実施組織が中心となり行われていることが紹介されました。次に、県立広島大学地域創生学部の広谷大助氏より「県立広島大学における大学基礎セミナー I の取り組み」の発表では、同大学必修科目の「大学基礎セミナー I」の開講状況、特に、Web アンケートを活用した各回における履修者の理解度や、疑問・質問、感想・意見等をフィードバックすること、そして、ルーブリック評価にも取り込まれたことが示されました。続いて、広島大学副理事の林光緒氏、同大学教育本部の吉田香奈氏による「広島大学における全学必修初年次教育科目『大学教育入門』の導入と成果」の発表では、1997年に導入された「教養ゼミ」から2018

年に新たに導入された「大学教育入門」(2単位)に至る経緯と、この授業デザインや形態(オンデマンド、対面)、方法(LMS等)の詳細についてコロナ禍前後の授業評価アンケートの結果に基づいて報告されました。最後に、愛媛大学教育・学生支援機構の上月翔太氏による「未来を切り拓く人材の育成にむけた初年次教育とその展開—愛媛大学における取り組み」の発表では、「新入生セミナー」の教育内容や工夫、実施組織の説明に加え、2年次以降のオンデマンドでの必修科目「未来思考リテラシー」(未来思考支援科目群構想)という試行的な高年次に関わる教養教育の志向性にも言及されました。総括すれば、入学前段階から高年次段階までの教養教育をめぐる探索的な好事例について、幅広く情報収集ができる分科会となりました。(文責：蝶慎一)

## 2. ティーチング・フェロー(TF)講習会の実施

### 【令和5年度 第1回 香川大学ティーチング・フェロー (TF) 講習会】

- 日時：令和5年9月13日（水）10:00～15:45
- 場所：幸町北キャンパス オリーブスクエア2階多目的ホール
- 開催方法：対面開催
- 受講者数：工学研究科博士後期課程の大学院生3名

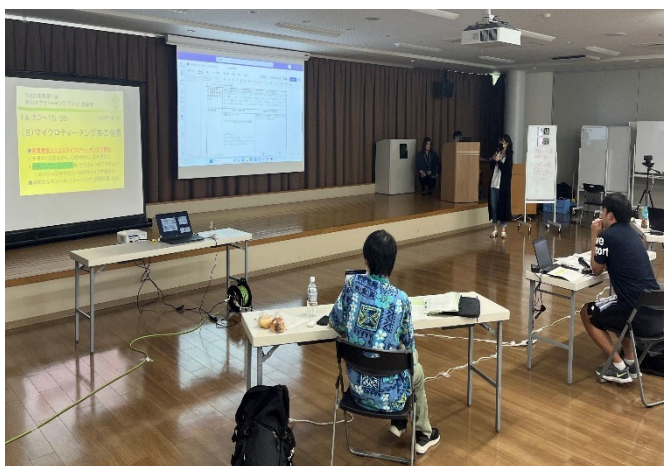
本学で初めてとなる令和5年度第1回「香川大学ティーチング・フェロー (TF) 講習会」を、大学教育基盤センター能力開発部による企画・実施・運営等、全面的協力のもとで開催することができました。当該講習会は、「国立大学法人香川大学指導補助者に関する規程」（令和5年4月1日施行）において、各学部、各研究科及び大学教育基盤センターが「指導補助者とすることができる者」のうち、新たに加えられた「ティーチング・フェロー」を対象に「職務内容に応じて必要な研修を行う」ことを目的としたものです。

そもそも日本の大学におけるティーチング・アシスタント (TA) 導入の歴史を振り返れば、1980年代後半以降には臨時教育審議会や大学審議会において政策的議論が開始されており（蝶、2023a）、令和4年度大学設置基準の改正や中央教育審議会大学分科会が公表した「教育と研究を両輪とする高等教育の在り方について（審議まとめ）」では、TAの役割や指導・教育に関わる補助者の育成等が取り上げられています（蝶、2023a、170頁）。こうした流れの中で実施された当該講習会は、時宜を得たものと言えます（蝶、2023b）。

当該講習会は、大きく2つの柱により、企画・実施致しました。

第1の柱は、本学で新たに置かれたティーチング・フェロー (TF) 等の基本的な紹介・説明に加え、TFとして授業にたずさわる上で不可欠な基本的知識やその評価やフィードバックの方法を理解し、修得することでした。これらは、「①オリエンテーション」、「③授業に関する基本的知識」、「④授業に関する評価やフィードバック」で行いました。

第2の柱は、TFとして授業担当教員の指導・監督の下で実際に授業の一部を担当できるように、1回分の授業案の作成や、マイクロティーチングを試みることでした。これらは、「⑤1回分の授業案をつくる」、「⑥1回分の授業案の発表」、「⑦マイクロティーチング案をつくる」、「⑧マイクロティーチング案の発表」で行いました。



(注) 受講者によるマイクロティーチングの様子

なかでも、1回分の授業案及びマイクロティーチングの実施を行う際には、高度な専門的、学術的な知見からのフィードバックや助言が必要であると企画段階より想定されたことから、松本洋明教授（能力開発部部长、創造工学部）、藤本憲市教授（能力開発部委員、同学部）より工学分野の教育的な観点から講師として一部ご参画いただきました。今回は、受講者3名全員が工学研究科に所属する大学院生であり、工学に関する具体的な授業案・マイクロティーチングの中身に深く踏み込んだ講習を展開できたことは大きな成果と考えております。今後も受講者の所属する研究科や専門分野等に可能な限り配慮した講師のラインナップを進めて参ります。

[講習会の概要]

時間	主な内容	主な講師等
10:00～10:15	①オリエンテーション (本学の TF、TA・SA 等の説明)	蝶 慎一 (大教センター)
10:15～10:25	②アイスブレイク	西本佳代 (同上)
10:25～10:40	③授業に関する基本的知識	西本佳代 (同上)
10:40～10:55	④授業に関する評価やフィードバック	佐藤慶太 (同上)
11:05～12:00	⑤1回分の授業案をつくる	蝶 慎一 (同上)
13:00～13:45	⑥1回分の授業案の発表 ⇒受講者どうし、担当者からのコメント、フィードバック、振り返り	受講者の大学院生3名 松本洋明 (創造工学部) 藤本憲市 (同上) 等
13:45～14:40	⑦マイクロティーチング案をつくる	蝶 慎一 (大教センター)
14:50～15:40	⑧マイクロティーチング案の発表 ⇒受講者どうし、担当者からのコメント、フィードバック、振り返り	受講者の大学院生3名 松本洋明 (創造工学部) 藤本憲市 (同上) 等
15:40～15:45	⑨修了証の授与、閉会挨拶	高橋尚志 (大教センター) 松本洋明 (創造工学部)

(注) 休憩時間。昼食時間等は除く。

最後に、大学教育基盤センター長より受講者3名全員に対して、「香川大学ティーチング・フェロー (TF) 講習会」の修了証が授与され、講師等とともに記念撮影を行い、終了となりました。講習会終了後も受講者どうしで懇談の時間が続いており、このような TF を対象とした講習会が大学院生のつながりを深める契機となることもうかがわれました。



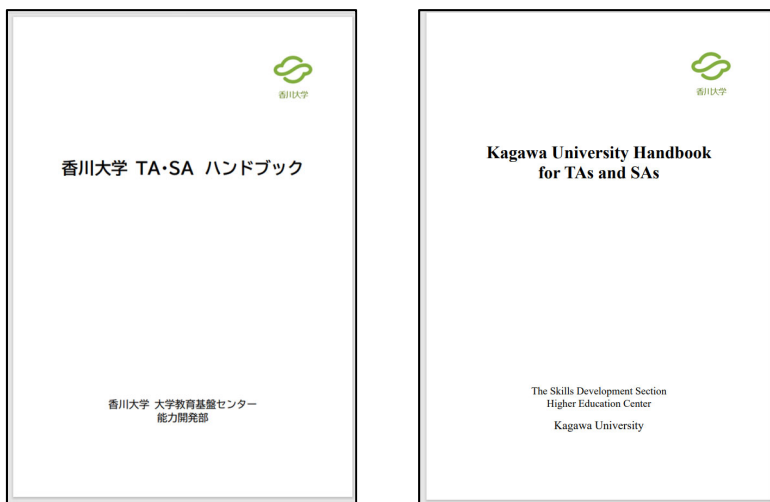
(注) 前列3名が受講者。



## 【『香川大学 TA・SA ハンドブック』、『Kagawa University Handbook for TAs and SAs』】 の紹介

大学教育基盤センター能力開発部では、「国立大学法人香川大学指導補助者に関する規程」（令和5年4月1日施行）の流れにあわせ、本学の指導補助者に位置づけられたティーチング・アシスタント（TA）、スチューデント・アシスタント（SA）を対象とした組織的な研修をするための実践的なハンドブックを作成致しました。まず、2023年3月に日本語版（全44頁）の『香川大学 TA・SA ハンドブック』を、同年5月には英語版（全43頁）の“Kagawa University Handbook for TAs and SAs”を TA 及び SA の対象者向けに学内共有しております。

具体的な企画、作成段階にあたり、「TA 研修コンテンツ作成」チームを編成しました。議論を重ねていく中で、このハンドブックには是非盛り込みたいとして「就業規則と『ハラスメント防止宣言』」、「個人情報保護について」、「合理的配慮」、「D&I 推進に向けてのガイドライン」等、「香川大学の TA・SA としての心構え」が複数挙がりました。そこで、能力開発部の委員をはじめ、学内の関係センターや関係部署の教職員に執筆にご協力・ご支援をいただき、TA 及び SA としてあらためて理解留意しておくべき事柄を収録しました。香川大学 Moodle「TA・SA 研修コンテンツ」よりダウンロード、閲覧可能ですので、TA 及び SA、また前述の TF の皆さまにも業務の際にはお手元で是非ともご活用ください。



（注）左側が日本語版の『香川大学 TA・SA ハンドブック』、右側が英語版の“Kagawa University Handbook for TAs and SAs”の表紙。

### 【『香川大学 TA・SA ハンドブック』の目次（※日本語版）】

- TA・SA のみなさんへのメッセージ
- I. 香川大学の理念と目標、学士課程の教育
- II. 香川大学の TA・SA 制度と「TA・SA 研修」
- III. 香川大学の TA 業務の主な具体例
- IV. 香川大学の TA・SA としての心構え

就業規則と「ハラスメント防止宣言」について

個人情報保護について

合理的配慮について

D&I 推進に向けてのガイドラインについて

V. 用語集

VI. 関係諸規則

VII. 学年暦（年間スケジュール）

（出所）香川大学 Moodle「TA・SA 研修コンテンツ」掲載内容より引用。

## 【TA・SA 研修コンテンツ】の紹介

前述の「TA 作成コンテンツ作成チーム」では、香川大学 Moodle において「TA・SA 研修コンテンツ」を作成し、『香川大学 TA・SA ハンドブック』等に連動させる形で研修動画（オンデマンド）を新たに作成し、全学的な研修コンテンツを提供しました。

香川大学 moodle  
TA・SA研修コンテンツ

コース 参加者 評定 コンピテンシ

▼ 本コースについて

本コースは、TA・SAとして活動する学生を対象とした研修コンテンツを掲載しています。  
業務につく前に各自で動画を視聴してください。

▼ TA・SAハンドブック (大学教育基盤センター 能力開発部, 2023年3月)

これからTA・SAになる学生の皆さんにぜひ理解いただきたい多くの内容が盛り込まれています。  
以下の研修動画を視聴するときのテキストとして、また、実際にTA・SAとしての業務を行うマニュアルとして、手元に置いて置ってください。

< 目 次 >

TA・SAのみなさんへのメッセージ

1. 香川大学の理念と目標、学士課程の教育
2. 香川大学のTA・SA制度と「TA・SA研修」
3. 香川大学のTA業務の主な具体例
4. 香川大学のTA・SAとしての心構え

就業規則と「ハラスメント防止宣言」について  
個人情報保護について

## 〔研修動画の概要（※動画の合計時間約 29 分間）〕

- ・ 香川大学の TA・SA（概要）：約 10 分
- ・ ハラスメント防止宣言と就業規則／個人情報保護について：約 7 分
- ・ 合理的配慮について：約 7 分半
- ・ D&I 推進に向けてのガイドラインについて：約 5 分

（出所）香川大学 Moodle「TA・SA 研修コンテンツ」掲載内容より引用。

## <参考文献>

蝶慎一（2023a）「1980 年代後半以降のティーチング・アシスタントをめぐる議論の再検討—導入期のあり方と実態に焦点を当てて—」『大学行政管理学会誌』第 27 号、169-181 頁。

蝶慎一（2023b）「多様化する TA の動向と協働」（配付資料）、令和 5 年度スキルアップ講座：新規講座、2023 年 9 月 21 日。

（文責：蝶 慎一）



## 4. 創造的科目支援育成事業の報告

昨年度に引き続き、令和5年度も全学共通教育改革の一環として、より魅力ある意欲的な科目への創造的な挑戦を含む授業に際して、科目の実施に対する支援を行う「全学共通教育創造的科目支援育成事業」を実施しました。今年度、創造的な科目に採択された8科目の取組を報告します。

■1Q 学問への扉（学びへのいざない）「越境する学問イ」／②1Q 学問への扉（学びへのいざない）「越境する学問ロ」

受講生数：①111名、②59名

授業担当者：石井知彦（創造工学部・教授）、岡田徹太郎（経済学部・教授）、倉野晴代（教育学部・准教授）、佐藤慶太（大学教育基盤センター・教授）、高橋尚志（教育学部・教授）、蝶慎一（大学教育基盤センター・准教授）、鶴町徳昭（創造工学部・教授）、寺尾徹（教育学部・教授）、野村美加（農学部・教授）、舟橋正浩（創造工学部・教授）、松岡久美（経済学部・准教授）、三宅岳史（教育学部・教授）、横平政直（医学部・教授）

□概要：双方向型遠隔講義と授業動画の提供によって教育効果を高める分野横断型の授業です。この授業では、分野の違う複数の教員が、受講生が関心をもつテーマを軸に、それぞれの学問の魅力、大学での学びの意義について語り（あい）ます。それを聞き、時に参加しながら、大学での学びの構えを身につける入門科目です。

□採択科目の創造性：この授業は6～7名の教員が担当する、オムニバスの分野横断型授業科目です。授業のなかで教員間・教員と学生間のやり取りを行い、学生のアクティブラーニング要素を取り入れることを基本とします。遠隔会議システムを使用しますが、遠隔参加の教員、教室にいる教員、教室にいる学生の間で、対面授業と同等のクオリティでのディスカッションを行うことを目指しています。また授業の内容をできるかぎり収録し、画質、音質のよい復習用動画を授業後に Web 上で視聴できるようにすることで、学生の自学自習を促します。

□実施内容と成果：今年度は、毎回、授業を動画として収録し、Teams 上で教員間の共有を行いました。これにより、各回の授業を参観できていない教員も、すべての授業の状況を把握することができるようになりました。また、イ組の第8回の授業では、遠隔参加の教員、教室にいる教員、教室にいる学生の間でディスカッションを行いました。支援育成事業の予算で購入したライブストリーミングミキサーおよび広角カメラのおかげで、遠隔配信において質の高い音質、画質を確保することができ、非常にスムーズなディスカッションを行うことができ、学生の評価も高いものでした。

なお、今年度の成果は SPOD フォーラム 2023 のポスター発表を通じて公開しました。（下図参照）

□今後の課題：学生向けの動画の公開方法について、課題が残りました。

現在は教員間で動画を共有するために Teams を使っています。これを学生に公開する場合、Teams をどのように活用するか、公開する場合のタイミングで行うか。また、学生の自学自習を念頭に置いて動画収録をするならば、講師が講義中にもいろいろと注意すべきことができますが、これが授業の進行に支障をきたすことも考えられます。これにどう対応するか。これらの問題に直ちに答えが出なかったので、今後議論を行い、これらをふまえて学生への動画公開を検討することとします。

(文責：佐藤慶太)

**香川大学 全学共通科目「越境する学問」の挑戦的取組**  
 横一、石井知彦、岡田徹太郎、倉野晴代、佐藤慶太、高橋尚志、鶴町徳時、寺尾 徹、野村美加、松岡久美、三宅岳史、舟橋正浩、横平政直  
 香川大学 1大学教育基盤センター、2新造工学部、経済学部、教育学部、3農学部、4農学部

**背景・政策動向**  
 ① グランドデザイン審議 (2018年) 文部科学省「大学の未来を拓く教育、時代の進化」に引継ぎ推進の推進力(2019年) ② 文部科学省「学際融合の推進と教育の充実」(2021年) ③ 文部科学省「学際融合の推進と教育の充実」(2021年) ④ 文部科学省「学際融合の推進と教育の充実」(2021年)

**分科横断型授業の高いニーズと開講の意義**  
 ・ 2021年度「学びへの思い」(AI/ロボット等の授業科目を抜く) ① 多様な学際融合・開講、様々な領域の連携等に対して異なるアプローチが図られていることを学んでもらう仕組み構築 (2021年度) ② 2022年度以降「越境する学問」として本授業実施 (2022年度)

**第4期中期共済期間における全学共通カリキュラム改革の推進**

**全学共通科目「越境する学問」の特徴—学生自身が学びをプロデュースするために—**

**【コンセプト】**  
 ① 分野の違う複数の担当教員 (新造工学部、経済学部、教育学部、農学部、医学部等) が、履修者が関心をもつテーマを軸にそれぞれの学際的能力、学びの準備について語り(話し)、学生主体に参加しながら、大学の学びの横断性を生みだすこと。 ② 各分野でそれぞれの専門的視点やアプローチの仕方を通じ、それを自分の関心に基づいて融合することを目指す。 ③ 各分野の異なる視点やアプローチを、履修者を軸とし、それを融合することを目指す。 ④ この授業を履修し、思いがけぬ学びのプランを生みだすこと。 ⑤ 履修評価の方法 ⑥ 各分野の異なる視点やアプローチの生みだすこと (20%) ⑦ 各分野の異なる視点やアプローチの生みだすこと (20%) ⑧ 履修者の学びの状況 (20%) ⑨ 履修者の学びの状況 (20%) ⑩ 履修者の学びの状況 (20%)

**【「越境する学問」の具体的・オリジナルな4つの取組】**

① 大学教育基盤センターの組織を基盤としたチーム編成  
 新任教員プログラムとの積極的な連携  
 ・ 多様な各学部の教員に参画した「大学教育基盤センター」が、履修者の関心をもつテーマを軸にそれぞれの学際的能力、学びの準備について語り(話し)、学生主体に参加しながら、大学の学びの横断性を生みだすこと。 ② 履修者が関心をもつ履修テーマの選定・設定の工夫  
 ・ SDG4履修テーマの選定は学生の関心と履修者の関心に基づき、各分野の異なる視点やアプローチを、履修者を軸とし、それを融合することを目指す。 ③ 授業の準備の実施  
 Microsoft Teams で担当教員どうしが情報共有  
 ・ 各分野の異なる視点やアプローチの生みだすこと (20%) ④ コンピューターを利用したレポート課題  
 デキスト3D (3Dモデリング) 技術を用いて  
 ・ 各分野の異なる視点やアプローチの生みだすこと (20%) ⑤ 履修者の学びの状況 (20%) ⑥ 履修者の学びの状況 (20%) ⑦ 履修者の学びの状況 (20%) ⑧ 履修者の学びの状況 (20%) ⑨ 履修者の学びの状況 (20%) ⑩ 履修者の学びの状況 (20%)

**成果の検証 (履修者回答)**  
 ・ 履修者の関心をもつ履修テーマの選定・設定の工夫  
 ・ SDG4履修テーマの選定は学生の関心と履修者の関心に基づき、各分野の異なる視点やアプローチを、履修者を軸とし、それを融合することを目指す。 ③ 授業の準備の実施  
 Microsoft Teams で担当教員どうしが情報共有  
 ・ 各分野の異なる視点やアプローチの生みだすこと (20%) ④ コンピューターを利用したレポート課題  
 デキスト3D (3Dモデリング) 技術を用いて  
 ・ 各分野の異なる視点やアプローチの生みだすこと (20%) ⑤ 履修者の学びの状況 (20%) ⑥ 履修者の学びの状況 (20%) ⑦ 履修者の学びの状況 (20%) ⑧ 履修者の学びの状況 (20%) ⑨ 履修者の学びの状況 (20%) ⑩ 履修者の学びの状況 (20%)

**担当教員の手ごたえと今後の課題**  
 ① 履修者の関心をもつ履修テーマの選定・設定の工夫  
 ・ SDG4履修テーマの選定は学生の関心と履修者の関心に基づき、各分野の異なる視点やアプローチを、履修者を軸とし、それを融合することを目指す。 ③ 授業の準備の実施  
 Microsoft Teams で担当教員どうしが情報共有  
 ・ 各分野の異なる視点やアプローチの生みだすこと (20%) ④ コンピューターを利用したレポート課題  
 デキスト3D (3Dモデリング) 技術を用いて  
 ・ 各分野の異なる視点やアプローチの生みだすこと (20%) ⑤ 履修者の学びの状況 (20%) ⑥ 履修者の学びの状況 (20%) ⑦ 履修者の学びの状況 (20%) ⑧ 履修者の学びの状況 (20%) ⑨ 履修者の学びの状況 (20%) ⑩ 履修者の学びの状況 (20%)

**【主な参考文献・URL】**  
 ・ 文部科学省「大学の未来を拓く教育、時代の進化」(2019年) ② 文部科学省「学際融合の推進と教育の充実」(2021年) ③ 文部科学省「学際融合の推進と教育の充実」(2021年) ④ 文部科学省「学際融合の推進と教育の充実」(2021年)

- ①1Q ライフデザイン科目「地域で活躍する職業人に学ぶ A」／②1Q ライフデザイン科目「キャリアデザインと自己理解」／③1Q ライフデザイン科目「地域で活躍する職業人に学ぶ B」／④3Q ライフデザイン科目「キャリアデザインと対人関係」／⑤前期集中特別主題(地域)実践型科目「キャリアデザインと地域貢献 A」／⑥後期特別主題(地域)実践型科目「キャリアデザインと地域貢献 B」

受講生数：①197名、②97名、③108名、④33名、⑤35名、⑥23名

授業担当者：原瑞穂(キャリア支援センター・特命准教授)

□概要：①③は、地域で活躍する職業人の講話を聴くことによって、代理体験により自己効力感を高め、イメージしたキャリアデザインを他者と共有する授業です。②は、講義を通して自身の興味や適性を考えます。キャリア理論を援用した既存のアセスメントを使用して興味関心や価値観などを探り、グループワークを通してさらに自己理解を深める授業です。④は、キャリア形成において重要な対人関係について学びます。これは社会人基礎力の一つ、「チームで働く力」にあたり、学生時代に身につけておきたい対人関係能力について考えながら身に付ける授業です。

□採択科目の創造性：①③本科目は、講師の生き方に触れることによって、キャリア形成の基盤である「生き抜く力」を考えます。また、他者と意見を共有することで価値観の違いを認め、自己の考えを深めます。入学直後に、本学で何を目指しどのように学び生活していく

か、見通しを立てさせることができ、モチベーションを高めることにつながります。②本科目は、キャリア形成プロセスの1段階目の自己理解を深めます。自分で考える、他者からのフィードバック、客観的指標を使用するという段階を踏みます。8回目には、自己のキャリアデザインについて過去、現在、未来を通して語るができるようになることを目指します。入学直後の学生に、自分の将来について考える機会を与え、他者との対話によって深く自己の価値を確認し、今後の学生生活に向かう自信を向上させます。④本科目は、キャリア形成プロセスの1段階目の自己理解を他者との関わりを通して深めます。他者との関わりをワークや既存のアセスメントを通して客観的に理解します。また、自己認識を改めるためにリフレーミングを援用し、フィードバックによって自己肯定感を高めます。8回目にコミュニケーション力の向上を軸にしたキャリアデザインを語れることを目指します。

□実施内容と成果：教育効果を測るために、定量・定性的調査を実施しました。定量的調査は事前事後に属性、自尊心、自己効力感、キャリアデザイン力、汎用能力、進路選択に対する自己効力を測るアンケート調査を実施しました。この内自己効力感尺度は市販の尺度 GSES を使用しました。定性的調査は OPFA (One Page Portfolio Assessment：堀哲夫，2013) を使用しました。さらに、科目②のプログラム内容は、上記の他に、キャリアの自己イメージ(興味関心、価値観、能力)のうち、興味関心に職業レディネステスト (Vocational Readiness Test: VRT) を参考に作成したアセスメントを、価値観にキャリア・アンカー (金子，2003) を、その他に職務適性テスト (株式会社ディスコ) を使用しました。

OPFA の記述内容から：科目①③の受講者は、「自分の行動次第では、可能性は無限大に広がっているし、得られるような事はたくさんあると思う。自分の考えを深めていくのに、かなり役立っていると思った」「普段自分の将来と今の自分についてこんなに深く考えることはありませんでした。1年生のうちにこのような機会を設け、深く考えられたのは良い経験」、「大学で何を学ぶか再考できた」など、深い思考や視野の広がりにも貢献できたと考えられます。科目②の受講者は、「自分の強みだけでなく弱みも受け入れて、どうやったら生かしていけるのかを考えていきたい」「もっと広くたくさんの経験をして、たくさん失敗することが必要だと思う」など、自己肯定感の向上から行動につながる感想が見られました。また、グループ活動によって「少しずつ自分に自信が持てるようになり(略)以前より行動的になった」「自信がついた」という者もいました。科目⑤は4日間の集中授業で、メタバースを取り入れた企業情報収集から課題解決までのグループ活動とプレゼンテーションでしたが、「それぞれが積極的になっていて、全員で一緒に成長できたように感じて嬉しかった」「挑戦することの楽しさと、成功する嬉しさを体験することができた」など、チームで何かを成し遂げた達成感と成長感を感じている学生が多く見られました。定量的調査は現在分析中です。





「地域で活躍する職業人に学ぶ A・B、「キャリアデザインと地域貢献 B」の風景

□今後の課題：入学時のキャリア意識の低さを自覚し、今後のキャリア形成に必要な行動は何かを具体的に考える学生が多く見られたことは、初年次のキャリア教育の到達目標を概ねクリアしていると思われます。受講によって醸成された学生のキャリア意識をどのように維持し、どのような支援や方策によって継続させていくのか、大学のキャリア支援の今後の課題であると考えています。  
(文責：原瑞穂)

#### ■2Q 学問への扉（研究のみかた）「やってみる科学」

受講生数：42名

授業担当者：授業担当者：寺尾徹（教育学部・教授）、野村美加（農学部・教授）、高橋尚志（教育学部・教授）、鶴町徳昭（創造工学部・教授）、野々村敦子（創造工学部・教授）、山中稔（創造工学部・教授）、杉野本勇氣（教育学部・准教授）

□概要：本授業も2年目を迎え、「創造的科目支援育成事業」における2年目支援を受けさせていただきました。この授業では昨年に引き続き、自然科学や社会科学の対象に実践的に直接ふれることによって教育効果を高めるという目的を追求してきました。1年目に引き続き、自然科学の広い分野から数学に至る多様な専門分野の教員が担当しました。昨年の学生の反応もふりかえり、実験や実習への導入方法をより工夫したりしながら、「やってみる」ことを合言葉に大学の学問の実際のおもしろさに生に触れる機会を提供しました。

□採択科目の創造性：昨年度まとめさせていただいた、「実験室を用いなくても、座学の授業で工夫することにより、自然科学や社会科学の対象に研究の現場で実践的に直接ふれることができる」という本科目の創造性を、いっそう発揮することができたと考えています。

□実施内容と成果：本授業は昨年に引き続き7つの実験テーマを各教員多担当し、教室や自宅、あるいは学外のまちかどで実践できる課題を学生とともに「やってみる」授業を展開しました。具体的には以下のようなテーマでした、「みんなで地図を作ってみる科学」、「計算からパターンを抽象化する科学」、「天然パン酵母を培養してみる科学」、「光と色～光と物質の相互作用の科学」、「公園の砂場でみる摩擦の科学」、「雲をつくり気候変動を考える科学」、「ストロートンボ・ペーパーシード」。その場で教員とともにあれこれとやってみるタイプのもの。教員が前で実際に実演をして見せて現象に引き付けておいたうえで、学生が各自家

で実際に頭をはたらかせて自然のおもしろさにふれるものなど、それぞれやり方にも多様性があります。そして最後に各自の問題意識や興味・関心に基づいて手作りの実験を行ってその成果をまとめてレポートとして提出してもらいます。レポートの採点も教員間で適宜分担し、一部の教員に負担が集中しないように工夫しました。なかには30点満点を取るようなレポートもありました。各自のアイデアを創造的に追求し、十分楽しんでいるレポートが高く評価されているように思います。

□今後の課題：昨年度の実践から、少々実験の数が多かったり課題がそれぞれ別々だったりという点でまごつく点も多かったのではないかと、という懸念もあり、実験の数が適切かどうかについても注意をして実施してまいりましたが、実験の数については適切だという受け止めが学生の間では一般的であることもわかってきました。分野的にも自然科学と数学からより広い学問に広げる可能性についても今後挑戦し、再度「創造的科目」としての発展を目指したいと考えています。

(文責：寺尾徹)



## 5. よりよい授業のための FD ワークショップ報告

日時：令和5年8月31日（木）～9月1日（金）

場所：幸町北キャンパス 5号館2階523教室

第14回「よりよい授業のためのFDワークショップ」が、令和5年8月31日(木)～9月1日(金)に、香川大学幸町北キャンパスの教育学部棟5号館523教室で開催されました。本ワークショップは平成22年より毎年開催されており、本学大学教育基盤センターの教員が講師を務めています。今回の参加者は、8名でした。ワークショップでは、新型コロナウイルス感染症が収束されている中で、今年度も対面で実施されました。



### ■プログラム概要 ※GW=グループワーク

1日目(研修は8:50～17:50)

- ・オリエンテーション
- ・アイスブレイク
- ・GW I「学生の考えるよい授業」
- ・講義 I「シラバスの書き方」
- ・GW II「全学共通科目の開発 I」
- ・講義 II「学生参加型授業の技法」
- ・講義 III「よりよい学習評価のために」
- ・GW III「全学共通科目の開発 II」
- ・グループ発表 I「中間発表」

2日目(研修は8:50～15:00)

- ・ふりかえり
- ・GW IV「全学共通科目の開発 III」
- ・GW V「全学共通科目の開発 IV」
- ・グループ発表 II「最終発表」
- ・閉会式

本ワークショップの目的は、授業を担当するにあたって必要となる基礎的な知識と技術を学ぶことです。具体的には、授業の構想・設計・実施・評価に関わる一連の過程をグループ作業として体験し、参加者相互の話し合いを経てそれに関する能力を身につけることです。

ワークショップのプログラム概要は左の通りです。内容では昨年度と同様に、参加者は全員パソコンを持参し、Microsoft Teams などを使いながら、全学共通科目の開発に取り組みました。各グループで、シラバス、授業計画、パワーポイント資料を作成し、発表を行いました。本年度では、参加者が少なく、2グループでの構成でワークを実施しました。

初日(8月31日)では、例年同様にアイスブレイクでお互いの自己紹介を通して初対面での“緊張”をほぐした後、「学生が考える良い授業」

について相互に意見を出し合いグループワークを始動しました。講義では、「シラバスの書き方」、「学生参加型の技法」および「よりよい学習評価のために」について実施され、それらを基に各グループで授業計画・シラバス作成のグループワークを行って頂きました。授業では、「お遍路」と「歌謡曲」の全学共通教育科目のテーマを採り上げ、どのように授業として進めるのか、じっくりとご議論(グループワーク)頂きました。初日ではシラバスについて中間発表頂き、講師の先生よりの確かなアドバイスを頂き、2日目に反映させました。2日目(9月1日)では初日で各講師陣から指摘された事項も修正したシラバスのブラッシュアップ

プ、またミニ授業（「お遍路」、「歌謡曲」）に向けたグループワークを実施し、午後より授業発表を頂き相互のチームでじっくり討議する事で授業内容での良い点、悪い点を議論していきました。このように今回のワークショップでも、様々なツールについても学ぶことができ、それらを全学共通科目の開発に採用することができ、非常に実りあるワークショップになれたと感じております。ワークショップ終了後では、コロナの状況もだいぶ収束された事から、対面での懇親会が開催され、お互いの情報交換と親睦を深める事ができました。

大学教育基盤センターの教員の方々と、修学支援課の職員の方々のご協力のおかげで、今年度も無事に、充実したワークショップを開催することができました。関係各位の皆様改めて深く御礼申し上げます。有難うございました。

（文責：松本洋明）



## 6. 注目のFDのご紹介

令和5年度に新たに実施したFDをご紹介します。

- 講義名：本学教員の生成系AIの利用に関して
- 日時：令和5年5月23日（火）16:00～17:00
- 開催方法：オンライン開催（MicrosoftTeams）
- 講師：西山 成（医学部教授）  
          阪口 福太郎 氏（日本マイクロソフト株式会社 文教営業統括本部 DX 戦略室長）
- 参加者：275名

令和5年5月23日に「生成系AIの利用に関して」の講義名で、本FDがオンライン開催されました。今回は、ChatGPT等の生成系AIの利活用本格化を背景に、

- 1) 生成系AIを教育現場で適切に利活用するスキルや知識を身に付けるための支援
- 2) 生成系AIに関する基礎的知識や特徴紹介、教育現場での利用にあたっての留意事項、  
    学生が使用する場合の適切な対応方法、情報漏えいや倫理的観点等の注意点を学ぶ  
    ことを目的に実施されました。

西山先生のご講演では、現場で生成系AIをご活用されている立場から、実際に現場でプロンプトを入力して頂き、論文のアイデア出し等をリアルタイムで生成し、その結果を示す大変具体的なFDになりました。また阪口様のご講演では、その専門的な立場から、生成系AIの安全性、留意すべき点等についてご講演頂きました。どちらのご講演でも生成系AIを活かし、これからの新しい大学教育の指針となる貴重なご講演でした。本FDに当たり、ご講演された先生方、またご参加頂きました多くの皆様には改めてお礼申し上げます。

（文責：宮崎英一）

- 講義名：生成AIを題材にAIの使い方について考える
- 日時：令和5年7月14日（金）16:00～17:30
- 開催方法：ハイブリッド開催  
          （対面：オーリーブスクエア2階多目的ホール／オンライン：Zoom）
- 講師：岡田 徹太郎（大学教育基盤センター地域教育部長／経済学部教授）
- 参加者：129名

本講義では、OpenAI社の「ChatGPT」を中心に、生成AIの特徴や活用方法について学びました。参加者はAIの発展や利用方法に関する様々な意見や印象についてZoom投票を

通じて意見交換を行いました。実際の生成 AI のデモンストレーションや FD 中の課題を通じて、生成 AI の実際の使い方や応用の幅、必ずしも正しい回答が得られないこと（ハルシネーション）を体験することができました。総じて、生成 AI の最新の議論を整理するとともに、生成 AI 技術の現状や将来の可能性についての理解を深めることができ、学びの多い講義となりました。



(文責・藤澤修平)

- 講義名：FD スキルアップ講座「多様化する TA の動向と協働」
- 日時：令和 5 年 9 月 21 日（木）13:00～14:30
- 場所：525 講義室（幸町キャンパス 5 号館 2 階）
- 講師：蝶 慎一（大学教育基盤センター准教授）
- 参加者：4 名

近年、全国の大学で急速にティーチングアシスタント（TA）改革が進んでいます。本学でも、従来の TA 制度が整備されたり、授業担当の一部を分担することができる授業補助者（ティーチング・フェロー：TF）の制度が走り出したりしています。しかし TA の歴史や全国的な動向についてはよく知らない、というのが一般の教員の本音ではないでしょうか（私もしかり）。この FD は、本学の TA、TF 制度設計の立役者である蝶先生が、TA の歴史から多様化が進む TA の実態について教授してくれるという贅沢な企画です。講座の中で「この機会を通じて、いかに大学院生の人間的な成長につなげることができるのか、考えることが重要」という言葉があり、心に残りました。TA、TF の制度を活用される教員の皆さんに、是非受けていただきたい講座です。

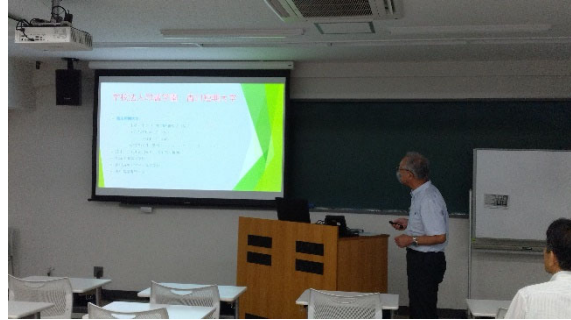
(文責・佐藤慶太)

- 講義名：FD スキルアップ講座「地方私立短期大学における教学 IR の仕組み」
- 日時：令和 5 年 9 月 21 日（木）16:20～17:50
- 場所：525 講義室（幸町北キャンパス 5 号館 2 階）
- 講師：加野 芳正（香川短期大学 学長／教授）、織田潤二（香川短期大学 学生支援部長／教授）、大久保直幸（香川短期大学 IR 室長／准教授）
- 参加者：5 名

香川短期大学から 3 名の先生をお招きして、「地方私立短期大学における教学 IR の仕組み」と題したご講演をいただきました。はじめに、加野学長から香川短期大学の概要についてお話いただいた後、織田学生支援部長から GPA と入試成績との相関等についてご説明い

ただき、最後に、大久保 IR 室長から卒業生満足度調査等についてご報告いただきました。

印象的だったのは、小規模大学という特性を活かした分析をなさっていることです。一学年約 200 名という規模で、授業や学生生活の分析をすると、自ずと授業を担当している教員や学生の顔が浮かんでいることが、ご講演の様子からうかがえました。教員や学生の顔が浮かべば、より具体的な教育改善に関する提案をすることができます。教学 IR を基盤とした教育改善に関する PDCA サイクルをまわすという点において、非常に参考になる取組でした。



(文責・西本佳代)

#### ■令和 5 年度 FD スキルアップ講座実施報告

例年開講している FD スキルアップ講座を、令和 5 年度は以下のとおり実施しました。

講義名：充実させよう！アクティブラーニング型授業－話し合い・教え合いの技法－

日 時：令和 5 年 9 月 21 日（木）14:40～16:10

場 所：525 講義室（幸町北キャンパス）

講 師：佐藤慶太（大学教育基盤センター教授）

参加者：2 名

講義名：充実させよう！アクティブラーニング型授業－図解・文章作成の技法－

日 時：令和 5 年 9 月 22 日（金）13:00～14:30

場 所：525 講義室（幸町北キャンパス）

講 師：西本佳代（大学教育基盤センター准教授）

参加者：3 名

講義名：充実させよう！アクティブラーニング型授業－問題解決の技法－

日 時：令和 5 年 9 月 22 日（金）14:40～16:10

場 所：525 講義室（幸町北キャンパス）

講 師：三宅岳史（教育学部教授）

参加者：4 名

講義名：事例から学ぶ問題発見・解決型授業のコツ

日 時：令和 5 年 9 月 22 日（金）16:20～17:50

場 所：525 講義室（幸町北キャンパス）

講 師：小坂有資（大学教育基盤センター特命講師）

参加者：5 名



## 7. 全学共通科目の授業公開

令和5年度、全学共通科目では7月～11月に以下4科目で授業公開を実施しました。

- 授業科目名：学問への扉「やってみる科学」
- 日 時：令和5年7月20日（木）5コマ
- 場 所：523 講義室（幸町北キャンパス5号館2階）
- 担当教員：高橋 尚志（教育学部）
- 内 容：紙工作を使って科学する。（紙（ストロー）トンボ、ベンハムのコマ、円環座法）
- 履修者数：42名
  
- 授業科目名：大学入門ゼミ E（6）
- 日 時：令和5年7月25日（火）3コマ
- 場 所：多目的室42（幸町南キャンパス総合教育棟）
- 担当教員：二ツ山 達朗（経済学部）
- 内 容：プレゼンテーションの発表（後半・約10人）  
（お題：日本学術会議に登録されている学会のなかから一つを選び、学会の概要とともに学会雑誌の一論文について紹介すること）
- 履修者数：22名
  
- 授業科目名：学問基礎科目 物理学 B イ「物理学の基礎Ⅱ」
- 日 時：令和5年11月2日（木）4コマ
- 場 所：411 講義室（幸町北キャンパス4号館1階）
- 担当教員：松下 春奈（創造工学部）
- 内 容：帯電導体と導体系
- 履修者数：16名
  
- 授業科目名：ライフデザイン「グローバルマインドセットと働き方」
- 日 時：令和5年10月31日（火）1コマ
- 場 所：332 講義室（幸町北キャンパス3号館2階）
- 担当教員：石原 淳也（産学連携・知的財産センター）  
植村 友香子（地域・産官学連携戦略室）
- 内 容：他国から学ぶグローバル化のヒント① -サウジアラビア王国編-
- 履修者数：52名



原稿を募集しています。

☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。

★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。

☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援課）までお願いします。